

絵画空想法 (Short Form)

作成の試み

— 施行簡便化のための一実験 —

1. はじめに	25
2. 方法	31
3. 結果	35
4. 考察	39
5. 文献	41

研究過程ならびに当稿執筆に当たってご協力いただいた皆様のお名前を記し、改めて感謝の意を表したいと思う。

小林和久氏
岩熊史朗氏
神木直子氏
菅野陽子氏
増野信子氏
大野靖子氏

中野敬子氏
西村麻由美氏
佐藤達朗氏
内藤ゆか氏
美ノ谷香代子氏
伊藤ひろみ氏

執筆者紹介

まきた ひとし (慶應義塾大学名誉教授)

いとう りゅういち (尚美学園短期大学助教授)

1

はじめに

1. パーソナリティの把握と 慶応式テストバッテリー……………	25
2. 絵画空想法 (PRT) ……………	26
3. 実験の概要……………	30

1. パーソナリティの把握と 慶応式テストバッテリー

本稿では、慶応式テストバッテリーを構成する
投影法の1つである「絵画空想法 (Short Form)
(以後、PRT (SF) と略記する)」作成の試みにつ
いて報告する。

慶応式テストバッテリーについて、概略を述べ
れば次のようになる。

パーソナリティの捉え方にはさまざまな立場が
ある。我々は、実際に把握しようとする観点か
ら、次のように捉えることが可能であろうと考
えている。

「個人は物理的・社会的・文化的環境の中に住
み、それらの影響を受けながら、しかもまた、そ
れらに対してある影響を与えていく1つの存在で
ある。そして、環境に住みながら環境に影響をあ
たえていく、そのような個人の統一体をパーソナ
リティと見ることができる。その統一体の主な生
理的・神経的基盤は脳にある。すなわち、脳は
有機体の行動の統一の所在であり、感情・意識・
葛藤・決断などの座である。ゆえに、パーソ

ナリティは脳に局在される。しかしまた、脳の
究明が生理学的に可能になったとしても、それ
はパーソナリティの個体的 (constitutional) な素
材ではあっても、パーソナリティそのものではな
い。また、我々は直接的には脳における生理的
過程を見ることはできないが、統一体としてのパ
ーソナリティの構造はその個人の言語や行動によ
って知ることができる。ここに心理学の対象が存
在する。ゆえに、心理学者の究明する対象はあく
までパーソナリティそのものである。そして、パ
ーソナリティとはその個人の生まれてから死ぬま
での一続きの系列 (人生) である。すなわち、パ
ーソナリティの歴史がそのままパーソナリティそ
のものであると考えられる (Kluckhohn, Mur
ray & Schneider (1953))」

パーソナリティをこのように捉えると、まず問
題となるのは、それをいかに把握するかというこ
とである。そのためには、構造や機能が分化・成
長していくパーソナリティの発達段階をいくつか
のエポック (たとえば、幼児期・少年期・青年期
など) に切り、その横断面を捉えるのが適当であ
ろう。そして、そのようなエポックごとの横断面
の総和としてパーソナリティを捉えることが、発

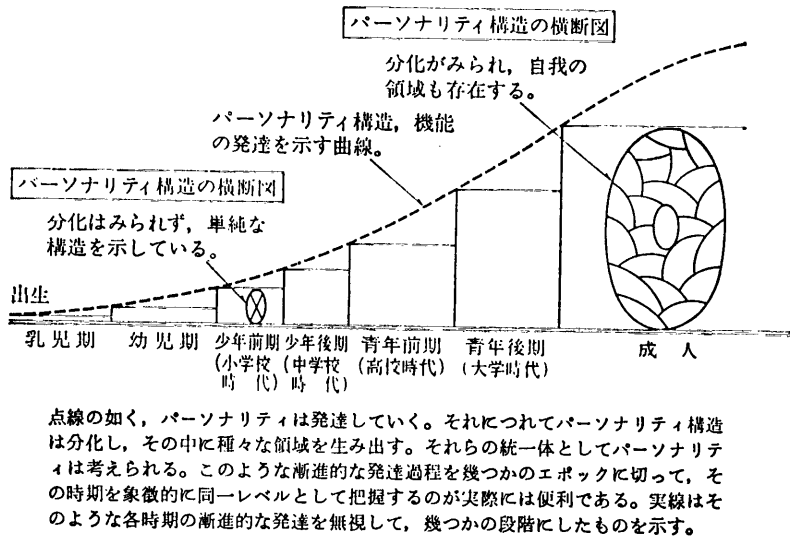


図 1-1 パーソナリティの発達過程図式

達段階を軽視せずにパーソナリティの把握を可能にする。この点を図式化したものが、図 1-1 である。

次の問題は、この横断面をどのように捉えるのがもっとも適切で実際的かということである。楨田ら (1990) は、図 1-2 に示すようなパーソナリティのシエマをあげている。

こうしたパーソナリティの全体像を把握するためには、いくつかの心理技法を組み合わせたテストバッテリーを構成する必要がある。

慶応式テストバッテリーは、

- Who Am I 技法 (WAI)
- 精研式文章完成法 (SCT)
- 基本生活領域診断技法 (DOSEFU)
- 絵画空想法 (PRT)

などによって構成されるテストバッテリーである。

これらの技法に、知能検査やインベントリーを適宜加えて施行すれば、パーソナリティの全体像を柔軟に現象学的に把握することが可能であろう。

このうち、本稿の主題である「PRT」は、力動、気質、指向などの側面、家庭、社会などの決定要因について、比較的深く把握することのできる技法といえる。

2. 絵画空想法 (PRT)

PRT は、Murray 以後の TAT 研究の歴史をふまえ、新たな視点で作成された投影技法である。

Murray ら (Murray, 1943; Murray ら, 1938) の提唱した、いわゆる「テーマ分析」「欲求-圧力分析」「ヒーロー仮説」には、その後多くの批判的検討が加えられてきた。

これらの批判の内容については、TAT のかわり分析を提唱した山本 (1967, 1992) に詳しいが、二点を述べれば次のようになる。

「TAT の分析表に沿って分析していくと、さまざまな力学的諸傾向が摘出されることはされるが、全体として生き生きとしたその人の人格構造が浮き彫りにされ得ないものになってしまう。しかし、TAT の物語には、こうした欲求-圧力の枠組みを越えて、全体像が生き生きと語られていることが多い」という批判。

「TAT 物語に反映されるものは、欲求や衝動そのものの過程である無意識的で本能的な一次過程ではない。それは、自我の防衛のパターン、主体が自分の内面の欲求や内面的に受けとめている外界からの圧力をどのように処理しようとしてい

a. パーソナリティの構造

パーソナリティの内容				決定要因	
能力的側面	情意的側面	指向的側面	力動的側面	個体的要因	環境的要因
2 人間らしい頭のはたらき、精神的分化、洞察、見通し、評価の客観性など 1 知能、知的作業の能率、IQ	的固定的なもの、性格類型など 気質→性格などの情意的相面のうち、比較	価値観、生活態度、人生観など その人が生きようとしているもの	攻撃、劣等感、合理化、逃避、コンプレックスなど その人の住んでいる心理的世界の安定→不安定の度合い	健康、容姿、体力、運動神経など	家庭的 家族、生育歴、家庭の雰囲気、父・母のパーソナリティ、しつけなど
					社会的 社会・経済的地位、生活水準、社会生活、職場の人とのつながりなど
気質→習性→ 態度→価値観					

b. テストの適用範囲

知能テスト	■					
文章完成法テスト (SCT)		▨	▨	▨	▨	▨
パーソナリティ・インベントリー (INV)		■		▨		
PRT (TAT)			▨	■	▨	
DOSEFU			■			

黒い部分はそのテストがおもにねらった範囲、斜線部分はある程度調べる範囲、白い部分は調べにくい範囲を示す。

図 1-2 パーソナリティのシマとテストバッテリー

るかといった、二次的な自我過程である」という批判。

こうした批判的検討を土台に、その人らしい基本的生き方、自我過程、生に対する関わり方を把握する方法として生まれたのが、PRT である。

PRT の内容については、PRT の手引書である「絵画空想法入門」(槇田ら, 1990) に詳しいが、その中では、PRT の作成過程と内容について、次のように述べられている。

「与えられた絵画により触発された物語を作るということは、畢竟そこに語り手の人生に対するかかわり方、その人らしい生存の構造が語られているということであろう。そして、そのような生に対するかかわり方の相違が、各自の人生に対する相違であり、あるいは、パーソナリティの相違といえる。

しかして、人間には、基本的に重要ないくつかの面がある。例えば、愛であり、孤独であり、生



図 1-3 PRT 図版

であり、死である。このような点について我々は皆、その人らしい生活感情でかかわっている。あるいは、その人らしい対処の仕方をしている。そして、そのような人生における重要な十字路にさしかかった時、人は皆その人らしい通り抜け方をする。ある人は立ち止まり、ある人は直進し、ある人は迂回する。また、中には通り抜ける

ことを避けて引き返す人もいる。

このような各人の人生に対するかかわり方、岐路の通り抜け方が、その人の人生にとって重要な部分を占める。そして、絵画に触発されて作られた物語に最もよく現れるのは、このような各人の通り抜け方の相違であり、それにとりま生活感情であり、それに対するかかわり方である。

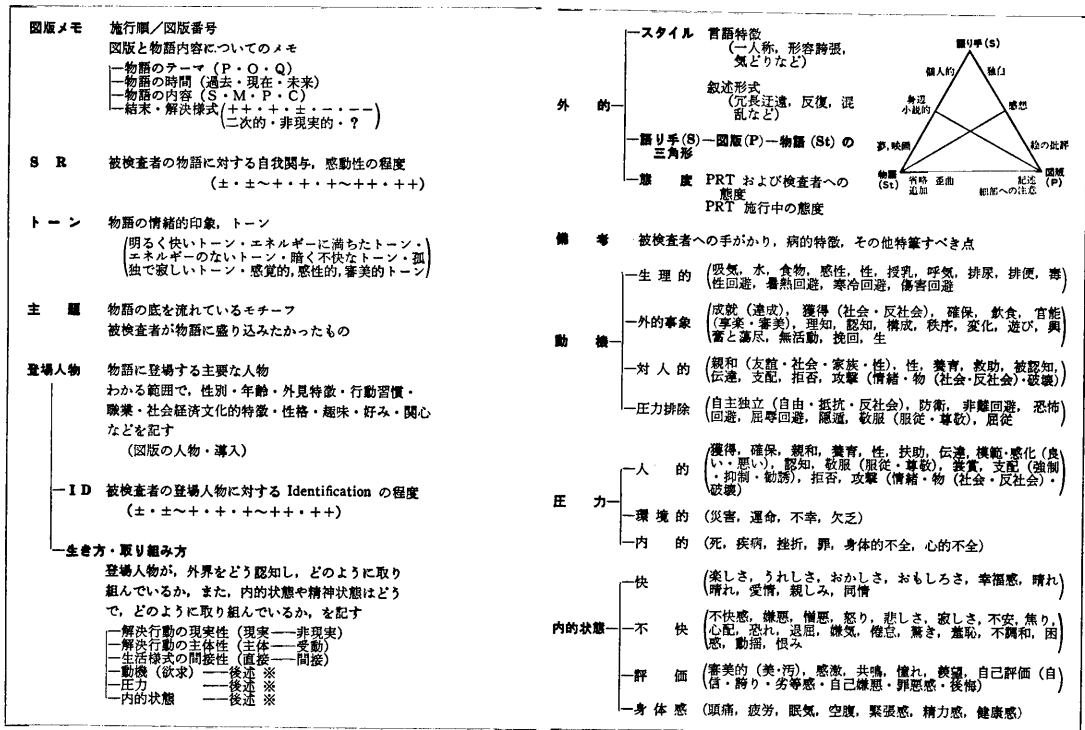


図 1-4 PRT 分析の手引き

「絵画空想物語」をこのようにとらえた時、与えられる絵画の条件はおのずから決まってくる。すなわち、人生にとって、人間にとって、最も基本的な交差点を metaphor として提示することである。そして、被検査者はその交差点に対する通り抜け方を metaphor として表現する。

我々は「絵画空想物語」をこのように考えた。しかれば、そのような交差点にはいかなるものがあるであろうか。言い換えれば、我々は“何があれば生きていけるのか”“何を失ったら困るのか”“何を恐れ、何にすがるといいのか”ということである。このような実存的な立場からの交差点の選択が必要である。これは既存の culture からの規制をはなれた、人間にとって基本的なものとなる。

刺激絵画をこのように考えた場合、なお、いくつかの重要な問題がある。

それは、その人らしい自由な通り抜け方がいろいろにできることであり、また、適応的構えを強制されないことである。そして、このような culture free な交差点であるならば、時代・人種・

国境をこえて人間に共通な刺激となり得るはずである」

こうした観点から作成された PRT 図版を 図 1-3 に示す。

また、PRT 分析の手引きを 図 1-4 に示す。本来の PRT 施行法は、以下の通りである。まず、「2.1. 刺激材料」のところで示す一定の順序で提示された図版 20 枚のそれぞれについて、被検査者に 5 分程度の物語を作らせ、それを記録する。

記録を文字に起こし、各物語の内容を、図 1-4 の評価項目ごとに評価する (整理段階)。

20 の物語すべてについての評価を終えたら、次にはそれらを通覧して、どのような共通性・共通特徴があるかを調べる。この際、SR (物語への自我関与、感動性の程度) を基準に、物語を高・中・低の 3 段階に分類し、各グループごとに要約をおこなうようにする (要約段階)。

こうした作業の結果得られた情報をもとに、PRT のねらいである基本的人間像の把握を行う

(解釈段階)。基本的人間像の内容は、生活空間、見通し、生き方・取り組み方（内界との取り組み・外界との取り組み、欲求、圧力）、主体性、柔軟性、生活態度、生活感情、自己同一性、パーソナリティの内容と決定要因などである。

3. 実験の概要

PRT は本来時間をかけて、じっくり行うのが好ましい。しかし、時には短時間に施行したい場合もある。それが、PRT (SF) である。

実際の場面では、SR の高い、物語を作りやすい図版を 6 枚ほど被検査者自身に選ばせ、施行す

る。このようにした場合の情報量、精度などが、スタンダードで行った時に比べて、どの程度かを検討するために行ったのが今回報告する実験である。

スタンダードで施行した PRT データの中から、各被検査者ごとに、比較的 SR の高い、被検査者についての情報の多い物語 6 つを選択し、PRT 訓練経験者に与えて、人物像の把握をしてもらった。すでにある総合診断結果と PRT (SF) の結果との比較、また補助情報として与えた SCT の有効性などが、検討課題である。

なお、当研究の内容の一部は、日本心理学会第 56 回大会において発表されている (小林ら, 1992)。

2

方法

1. 刺激材料	31
2. 評価者	31
3. 評価項目と評価方法	31

1. 刺激材料

すでに慶応式テストバッテリーでパーソナリティ総合診断済みのケース・ストックの中から、26名(20~50歳代の男性14名、女性12名)の被検査者を選択した。彼らは、「3. 評価項目と評価方法」で述べる評価項目の病的特徴に関して、いずれも、「1: 精神病レベル」「2: 神経症レベル」には属しておらず、「4: 健康」あるいは「3: 不安あり」の範疇に入っていた。

そして、彼らの PRT データの中から比較的 SR の高い、被検査者についての情報の多い物語 6 つを著者らが任意に選択した。それに SCT のデータを加えたものが、今回の刺激材料である。

使用した物語の数は 156 (26 名×6) である。その内訳は、「施行順/図版 No.」別に、

1/1MF : 8	11/N1 : 2
2/N13 : 9	12/N12 : 4
3/N4a : 8	13/N3b : 10
4/N9 : 8	14/N2 : 5
5/N17a : 11	15/N11a : 12
6/N5a : 9	16/N14 : 11

7/N18a : 5	17/N6c : 2
8/N10a : 8	18/N16 : 8
9/N7 : 3	19/N15 : 9
10/N8 : 4	20/12MF : 20

である。結果的にすべての図版の物語が使用されており、個人差のバラエティと PRT 図版の有効性を示すものとなっている。

2. 評価者

慶応式テストバッテリーによる総合診断の訓練を1年以上受けた者9名(男性2名、女性7名)に評価者を依頼した。

3. 評価項目と評価方法

評価者に原則3ケースの刺激材料を渡し、まず PRT (SF) の情報のみを用いて評価を行い、次にそれに SCT の情報を加えて、再度評価を行うよう依頼した。

図 2-1 に、評価項目を並べた評価用紙を示す。ただし評価用紙中、斜字で書かれている部分は評価者が記入すべき内容またはその説明である。

【PRT (SF) 評価用紙】

評価者: 横田 仁

S No.: ケース 9

	Plate No		S	R	
S R					
	1	1/INF	±	±~+	+ +~++ ++
	2		±	±~+	+ +~++ ++
	3		±	±~+	+ +~++ ++
	4		±	±~+	+ +~++ ++
	5		±	±~+	+ +~++ ++
	6		±	±~+	+ +~++ ++

生活空間 (広い・平均的・狭い)
 コメント: S (被検査者)の生活空間の広さ・内容、時間的見通しの概など

生き方・取り組み方 (現実性: 現実的・前行動・空想的)
 Sの生き方・解決様式の現実性
 (主体性: 主体的・平均的・受動的)
 Sの欲求-圧力のバランス、主体的か圧力優位か
 (間接性: 直接的・平均的・間接的)
 Sの生活様式が直接的か防衛制約的(間接的)か
 コメント: Sの人生や生活に対する取り組み方、かかわり方について、欲求、圧力、調整場面における解決様式、生活態度、生活感情(男-時-夜-不夜)、内面や外面に対する認識様式、環境に対するかかわり方、自己同一性、自己確信感、柔軟性など

能力的側面 (diff.: --~+ ± ±~+ + +~++ ++)
 コメント: Sの知能、精神的分化度、見通し、調整力、特殊な能力など

情意的側面 (基本性格類型: ESH)
 コメント: Sの気質、気質の性格、葛藤、情緒など

指向的側面 (欲求: 達成動機、親和動機 など)
 (圧力: 喪失、死 など)
 コメント: 「生き方・取り組み方」と重なるが、Sの持つ欲求・圧力の内容、キヤセクション、人生観、価値観など

力動的側面 (とても安定・まあ安定・不安定)
 (コンプレックス: 劣等感、母親固着 など)
 コメント: Sの安定性、セキュリティの程度、防衛機制の内容など

病的特徴 (健康・健康だが不安あり・神経症レベル)
 コメント: Sのもっている病的特徴
 現在は安定しているが将来については不安のあるケースもその旨記す

全体的印象 (好感度: 好き・普通・嫌い)
 コメント: Sや物語内容について、評価者のもった第一印象、好感度、特記事項、その他

図 2-1 PRT (SF) 評価用紙
 (斜字は、評価者が記入する内容またはその説明である)

評価用紙の中で、カテゴリーを数値の形に直して統計的分析を行った項目を「客観的分析を行った評価項目」ということにする。客観的分析のための評価項目とそのカテゴリーは以下のものである。

- (1) SR
 1: ±, ±~+ 2: + 3: +~++, ++
 * 6つの物語のSRの平均値をデータとした
- (2) 生活空間
 1: 狭い 2: 平均的 3: 広い
- (3) 生き方・取り組み方: 現実性
 1: 空想的 2: 前行動 3: 現実的
- (4) 生き方・取り組み方: 主体性
 1: 受動的 2: 平均的 3: 主体的
- (5) 生き方・取り組み方: 間接性
 1: 間接的 2: 平均的 3: 直接的
- (6) 能力的側面: 精神的分化度 (diff.)

- 1: -- 2: - 3: ± 4: + 5: ++
- (7) 情意的側面: 気質 1: S 2: E 3: Z
 * 例えば、SとSあるいはSeとのズレを0,
 SとSEとのズレを0.5,
 SとEとのズレを1,
 SとZとのズレを2とした
 くわしくは、「3.3. 評価項目の客観的分析」参照のこと。
- (8) 情意的側面: H 1: ± 2: + 3: ++
- (9) 情意的側面: N 1: ± 2: + 3: ++
 * (8) (9) は、
 例えば、±と±~+とのズレを0.5,
 ±と+とのズレを1,
 ±と++とのズレを2とした
 くわしくは、「3.3. 評価項目の客観的分析」参照のこと。
- (10) 力動的側面
 1: 不安定 2: まあ安定 3: 非常に安定

- (11) 病的特徴
1: 精神病レベル 2: 神経症レベル
3: 不安あり 4: 健康
- (12) 全体的印象: 評価者が被検査者に持つ好感度
1: 嫌い 2: 普通 3: 好き
- (13) 全体的印象: 評価の総合確信度 (%)
* 自由記述の数字を書いてもらい、そのままデータとした

また、コメントは、(2)～(12)の各項目と、欲求、圧力、コンプレックス、全体的印象などについて、与えられた情報から把握可能な範囲で自由記述してもらった。

さらに、(12) (13)を除く各項目の評価・コメ

ントについて、評価の確信度を次の A・B・C・Dの中から選んで欄外に記述してもらった。

- A: 75～100% (確信度 90% として評価)
B: 60～74% (確信度 70% として評価)
C: 45～59% (確信度 50% として評価)
D: 0～44% (確信度 30% として評価)

分析は、① PRT (SF) 単独、② PRT (SF)+SCT の2段階で行われた。評価データ、コメントはすでにある総合診断結果とつきあわせられ、客観的分析と、コメント・自由記述の現象学的分析が並行して行われた。コメント・自由記述の分析・評価は槇田が担当した。

3

結果

- 1. 評価者と被検査者の関係……………35
- 2. 確信度の分析……………35
- 3. 評価項目の客観的分析……………35
- 4. コメントの現象学的分析……………37
- 5. 評価者別データ……………38

1. 評価者と被検査者の関係

評価者（のべ人数）と被検査者の人数の内訳を表 3-1 に示す。評価者の実数は男性 2 名、女性 7 名である。

また、評価者が被検査者にもつ好感度を表 3-2 に示す。PRT (SF) のみを用いた評価（p 条件）

表 3-1 被検査者と評価者の人数

被検査者 評価者 (のべ)	男	女	計
男	2	4	6
女	12	8	20
計	14	12	26

表 3-2 評価者が被検査者に持つ好感度 (n=26)

	嫌い	普通	好き
p	8	17	1
ps	9	15	2

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価

と PRT (SF) に SCT を加えた評価（ps 条件）との間に、大きな差はないようである。

2. 確信度の分析

項目ごとの確信度の平均値を表 3-3 に示す。いずれの項目でも、また、p 条件、ps 条件ともに、確信度は概ね 0.6~0.7 の範囲になった。全項目の平均値を算出すると、p 条件より ps 条件の方が、わずかに上回る数字が得られた。

全項目の確信度の平均値と全体的印象の総合確信度を表 3-4 に示す。これらの数字はほぼ同じ値を示し、総合確信度も、項目確信度と同様、p 条件より ps 条件の方が、わずかに上回る数字が得られた。

60~70% という確信度のもつ意味は明確ではない。あまり高い数字とはいえないが、まったく自信がないという数字でもないということがいえるかもしれない。

3. 評価項目の客観的分析

客観的分析では、上記各項目カテゴリーの前に

表 3-3 項目ごとの確信度の平均値 (%)

項目	平均値
SR p	0.67
SR ps	0.67
生活空間 p	0.62
生活空間 ps	0.62
現実性 p	0.62
現実性 ps	0.65
主体性 p	0.62
主体性 ps	0.65
間接性 p	0.62
間接性 ps	0.65
Diff. p	0.64
Diff. ps	0.70
気質 p	0.59
気質 ps	0.61
H p	0.59
H ps	0.61
N p	0.59
N ps	0.61
力動 p	0.64
力動 ps	0.68
病的特徴 p	0.69
病的特徴 ps	0.71
p	0.63 (SD:0.03)
項目確信度 (全項目平均)	
ps	0.65 (SD:0.04)

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価

表 3-4 評価の確信度 (%)

	総合確信度	項目確信度の平均値
p	62.7	62.6
ps	65.0	65.1

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価

付した数字を数値データとし、総合診断結果とのズレの絶対値を分析対象とした。

+/- の符号のついたズレの数値をそのまま用いた分析も行って見たが、+/- がならされて、小さな値になることが多かったので、分析対象にはズレの絶対値を選ぶことにした。

項目ごとに算出したズレの平均値を表 3-5 に示す。またここでは、ズレに項目確信度をかけあわせた数値の平均値も同時に算出してある。

数値を見ると、病的特徴や N の評価でズレがやや小さく、精神的分化度でやや大きいほかは、概ね 0.5~0.7 の数字が示されている。

表 3-5 評価のズレ (絶対値) の平均値

項目	ズレの平均値 (絶対値)
SR p 差	0.59
SR p 差*確	0.42
SR ps 差	0.58
SR ps 差*確	0.42
生活空間 p 差	0.50
生活空間 p 差*確	0.34
生活空間 ps 差	0.54
生活空間 ps 差*確	0.36
現実性 p 差	0.69
現実性 p 差*確	0.44
現実性 ps 差	0.69
現実性 ps 差*確	0.45
主体性 p 差	0.69
主体性 p 差*確	0.41
主体性 ps 差	0.54
主体性 ps 差*確	0.34
間接性 p 差	0.62
間接性 p 差*確	0.42
間接性 ps 差	0.73
間接性 ps 差*確	0.51
Diff. p 差	0.77
Diff. p 差*確	0.51
Diff. ps 差	0.77
Diff. ps 差*確	0.53
気質 p 差	0.58
気質 p 差*確	0.35
気質 ps 差	0.50
気質 ps 差*確	0.29
H p 差	0.69
H p 差*確	0.43
H ps 差	0.73
H ps 差*確	0.44
N p 差	0.46
N p 差*確	0.29
N ps 差	0.31
N ps 差*確	0.19
力動 p 差	0.58
力動 p 差*確	0.35
力動 ps 差	0.46
力動 ps 差*確	0.30
病的特徴 p 差	0.31
病的特徴 p 差*確	0.18
病的特徴 ps 差	0.39
病的特徴 ps 差*確	0.24

p 差 0.59 (SD:0.13)
《P差*確 0.38 (SD:0.09)》

評価のズレ (全項目平均)

ps 差 0.57 (SD:0.15)
《PS差*確 0.37 (SD:0.11)》

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価
差 : 評価のズレ
差*確 : 評価のズレ×項目確信度

p と ps の 2 条件間の差は、項目別では「力動」で 5% 水準で有意な差が出たほかは、いずれの項目でも見られなかった。

表 3-6 に全項目の評価のズレの平均値を示す。

表 3-6 評価のズレ（絶対値）の平均値

	全データ	男性ケース	女性ケース
p	0.59	0.60	0.57
ps	0.57	0.58	0.55

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価

ここでは、ほんのわずかな差ではあるが、SCT 情報を加えた方がズレが少なく、また、女性ケースの方がズレが少なく評価されていることが示された。

4. コメントの現象学的分析

コメントの分析は以下のような手順で行った。まず、総合診断の結果に眼を通した上で、p 条件、ps 条件の順で、各項目のコメント、欲求、圧力、コンプレックスなどの記述を見た。そして、総合診断の結果を 100 とした場合に、凡そ、何%位の広さ・深さで把握できているかを 5% 刻みで評価した。その把握度の平均値を表 3-7、3-8 に示す。

表 3-7 現象学的分析による把握度の平均値 (1)

	全データ	男性ケース	女性ケース
p	70.2%	75.7%	63.8%
ps	72.4%	77.5%	66.7%

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価

データは、p 条件より、ps 条件の方が、2 ポイントほど把握度が増すことを示している。しかし、PRT (SF) 単独でも総合診断結果の 70% 程度の把握度を得られていることがわかる。

また、表 3-7 を見ると、2 条件ともに、男性ケースのほうが 10 ポイント程度上回って、より正確に把握されていることがわかる。表 3-6 に見られる客観的分析の結果は逆に女性ケースの方が評価のズレが小さくなる傾向を示していたが、その差は小さく、有意差とはいえないものであった。

表 3-8 には、好感度と把握度との関連、総合確信度と把握度との関連の検討結果が示されている。客観的分析では、好感度や総合確信度が異なっても評価のズレに大きな差はみられなかった。しかし、把握度に関してはどちらの場合も一定の

表 3-8 現象学的分析による把握度の平均値 (2)

	全	好感度 p の群間 (嫌-普通・好 n= 8, 18)	好感度 ps の群間 (嫌-普通・好 9, 17)	総合確信度 p の群間 (<.7 - .7≤) 16, 10	総合確信度 ps の群間 (<.7 - .7≤) 18, 8
p	70.2%	72.5% - 69.2%	-----	67.8% - 74.0%	-----
ps	72.4%	-----	75.0% - 71.2%	-----	70.6% - 76.9%

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価

表 3-9 評価者別平均値

\ 評価者No.										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
全 (ケース数= 3)	3	3	3	3	2	3	3	3	3	
評価のズレ (絶対値) p	58.9	54.8	72.4	59.4	76.4	42.3	60.9	61.2	45.5	51.2
評価のズレ (絶対値) ps	56.6	60.9	55.8	59.1	70.3	37.7	60.9	62.7	48.5	47.6
把握度の平均値 p	70.2%	61.7%	68.3%	66.7%	70.0%	80.0%	71.7%	68.3%	76.7%	71.7%
把握度の平均値 ps	72.4%	65.0%	76.7%	68.3%	71.7%	82.5%	71.7%	71.7%	76.7%	71.7%

※ p : PRT (SF) のみの評価
ps : PRT (SF) + SCT の評価
評価のズレ (絶対値) : (評価者ごとに計算したズレの平均値 (絶対値) の平均) × 100
把握度の平均値 : 横田の現象学的分析による把握度の平均値

傾向がみられるように思われる。

表を見ると、両条件ともに、好感度が低く、嫌いと判断されたケースの方が、普通あるいは好きと判断されたケースよりも把握度が3~4ポイント高いことがわかる。

また、総合確信度が高い(0.7以上)方が、6ポイントほど把握度が高くなっていることがわかる。

5. 評価者別データ

表 3-9 に評価者別の、ズレの平均値、把握度の平均値を示す。今回の実験では、9名の評価者に3ケースずつ(女性評価者1名のみ2ケース)の評価をしてもらった。結果は、やはり、把握度が高い評価者の方が評価のズレが小さくなる傾向が示されているようであった。

4

考察

1. 考察	39
2. PRT (SF) の施行方法	39

1. 考察

PRT (SF) の把握度・適中率は 70% と比較的高く、それに SCT を加えれば、さらに効果的にパーソナリティを把握可能なことが示された。

当然のことではあるが、評価者ごとの適中率にはかなりの差がみられた。しかし、評価のズレと把握度には一定の関連があり、やはり、把握度の高い評価者は評価のズレも少ないようであった。

女性評価者が多数を占めたにもかかわらず、女性ケースの把握度は男性ケースに比べかなり低いレベルとなった。女性ケースの把握の難しいことは、経験的に臨床場面ではよく言われてきたことであるが、それを裏付けるデータとなった。

客観的分析では、分析項目間にあまり評価の難易度が見いだせなかった。確かに、N や病的特徴でややズレの値が小さくなったが、これらの項目はもともと被検査者間の差が小さく、ズレの値だけで評価の容易な項目と決めつけることは難しいようである。一方、精神的分化度のズレはやや大きな値となったが、これももともと選択の幅が他の項目に比べて 2 倍以上大きくあり、これだけで

評価の歪む項目と決めつけることは難しいようである。

確信度は、正確な評価の場合に高まる傾向がみられた。これも日常経験的に臨床場面で体験していることであるが、やはりそれを裏付けるかたちとなった。

また、好感度は把握度と負の相関関係をもつようであった。好感度が高まると把握度が落ちる。それは、光背効果その他の対人認知を歪める要因が働く可能性を示唆しているようである。

2. PRT (SF) の施行方法

結論として、PRT (SF) は時間のない場合の PRT の便法として十分にその役割を果たすことが確認できた。

そこで、最後に、PRT (SF) について、一応の定式的な施行方法を述べておきたい。

各図版、5 分程度の物語を作ってもらふ点は、スタンダードな PRT の施行方法と同様である。ただ異なる点は、練習のための 1MF と、最後の 12MF (ブランクカード) を除いて、18 枚の中から、物語を作りやすいと思われる図版 6 枚ほど

を選択する点である。施行方法を簡条書すれば、以下のようになる。ただし、細かい施行方法、インストラクションなどについては、スタンダードな PRT の解説書である「絵画空想法入門」(楨田ら, 1990) を参照されたい。

PRT (SF) 施行方法

- (1) 被検査者とラポールをとるよう努める
- (2) 練習として、1 MF を見せ、物語を作ってもらおう
- (3) 1 MF と 12 MF を除く 18 枚の図版を被検査者に見せ、物語を作りたいと思う図版を 6 枚ほど選んでもらう。もちろん、検査者が適当に選んでも、あるいは、被検査者と協同して選んでもよい
- (4) 「2. 1. 刺激材料」の所で述べた定式の施行順に合わせて、選んだ図版で物語を作ってもらおう
- (5) 12 MF (ブランクカード) を見せ、物語を作ってもらおう
- (6) サイドインフォメーションをとる

この施行法を用いれば、およそ 1 時間で PRT (SF) を施行できることと思う。また、整理・要約・分析に要する時間も短くて済む。

ちょうど、スタンダードの施行方法でいえば、SR が高い H グループの物語を要約し、分析・評価した場合と同様の情報量が、短時間で得られることになるはずである。

もちろん、既に述べたように、本来 PRT はじっくり時間をかけて、たんねんにやるのが好ましい。SR の低い物語の中に、被検査者のパーソナリティを形作る重要な要素が隠れていることも稀ではない。しかし、最近の臨床現場は効率が重視され、1 つの心理技法に時間を費やすことを避ける傾向が強い。便法として、短い時間で効率よく情報が得られる方法を試みることにした所以である。

5

文献

- Kluckhohn C., Murray H. A. & Schneider D., *Personality in nature, society and culture*, 2nd ed., Knopf., 1953.
- 榎田 仁・中野敬子・伊藤隆一 絵画空想法入門 金子書房 1990.
- Murray H. A., *Thematic Apperception Test Manual*, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1943.
- Murray H. A., et al., *Explorations in Personality*, New York, Oxford Univ. Press, 1938. (外林大作訳
パーソナリティ 誠信書房 1962).
- 小林和久・榎田 仁・伊藤隆一・岩熊史朗・西村麻由美 PRT Short Form (絵画空想法 SF 版) 作成の試み
——妥当性に関する一実験—— 日本心理学会第 56 回大会発表論文集, 129, 1992.
- 山本和郎 TAT-かかわり分析法: 異常心理学講座 第 2 巻 心理テスト みすず書房 1967.
- 山本和郎 TAT かかわり分析 東京大学出版会 1992.